



二  
天竺  
佛  
經

東京大学  
2197  
4  
2





利生  
2.197  
卷

万葉集卷二之標

相聞

難波高津宮

○皇后思天皇御哥

近江大津宮

○天皇賜鏡女王御製哥

○鏡女王贈字ヲオホオミ內大臣哥

○鏡女王奉コタ和哥

○內大臣娶安見兒哥

○久米禪師ノセジ婢石川郎女哥

○郎女和哥

○禪師更贈哥

○禪師更詠哥

○大伴宿禰ニ婢巨勢郎女哥

○郎女和哥

明日香清御原宮

○賜藤原夫人御製哥

○夫人奉和哥





藤原宮

○大<sup>オホク</sup>伯皇女御哥 大津皇子下 伊勢時

○<sup>ヒナシ</sup>郎女奉和哥

○日<sup>ヒナシ</sup>並知皇子尊賜石川郎女御哥

○<sup>ヒナシ</sup>姬王奉和哥

○<sup>ヒナシ</sup>但馬皇女接穗積皇子事形後御哥

○<sup>ヒナシ</sup>但馬皇女思穗積皇子御哥

○<sup>ヒナシ</sup>郎女奉和哥

○<sup>ヒナシ</sup>三方沙弥聖園臣生羽之女後作哥

○<sup>ヒナシ</sup>沙弥更詠哥

○<sup>ヒナシ</sup>田主和哥

○大津皇子贈石川郎女御哥

○<sup>ヒナシ</sup>大津皇子婚石川郎女哥 通古 露之

○<sup>ヒナシ</sup>弓削皇子贈額田姬王御哥 率吉 野時

○<sup>ヒナシ</sup>後吉野遣羅生松柯時額田姬王奉哥 ガエラ

○<sup>ヒナシ</sup>穗積皇子遣志賀山寺時但馬皇女御哥

○<sup>ヒナシ</sup>舍人皇子贈舍人郎女御哥

○<sup>ヒナシ</sup>弓削皇子思紀皇女御哥

○<sup>ヒナシ</sup>生羽之女和哥

○<sup>ヒナシ</sup>石川郎女贈大伴田主哥

○<sup>ヒナシ</sup>郎女更贈哥

○<sup>ヒナシ</sup>石川郎女贈大伴宿奈万吕哥

○<sup>ヒナシ</sup>柿本人万吕從石見國別妻上哥 長 挽哥

カトシラフタ

○<sup>ヒナシ</sup>後園木宮有馬皇子結松枝御哥

○<sup>ヒナシ</sup>山上憶良追和哥 オヒナカフ

○<sup>ヒナシ</sup>近大津宮天皇不豫時皇后奉哥 ニヤヒマス

○<sup>ヒナシ</sup>婦人哥

○<sup>ヒナシ</sup>大后御哥

○<sup>ヒナシ</sup>從山科御陵退散時額田姬王哥 ニカリカケル

明皇清御石宮

○<sup>ヒナシ</sup>十市皇女萬死時高市白皇子尊御哥 スキマラ

○<sup>ヒナシ</sup>長皇子與皇弟御哥

○<sup>ヒナシ</sup>柿本人万吕妻 依羅 郎女 與 人 万吕 別

○<sup>ヒナシ</sup>長意吉万吕見結松哥 オキ

○<sup>ヒナシ</sup>天皇崩時大后御哥 ニヤヒマス

○<sup>ヒナシ</sup>大殯時哥 オホミナリ

○<sup>ヒナシ</sup>石川夫人哥



○天皇山崩時太后御哥 長

△夢唱賜御哥 長

**藤原宮** ○大來皇女從伊勢皇時御哥 長

○移葬大津皇子時大來皇女御哥 長

○日並知皇子尊殯時柿本人麻呂哥 長

△或本哥

○同殯時舍人茅哥 長

○柿本人麻呂獻忍坂部皇子哥 長

○高市皇子尊殯時柿本人麻呂 長

○高市皇子尊殯時捨限女王哥 長

○但馬皇女薨後穗積皇子 長

△弓削皇子薨時置始東人哥 長

△短哥

○柿本人麻呂所竊通娘子死後作哥 長

○同人妻死時哥 長

○吉備津采女死時同人哥 長

○狹岑島視死人同人哥 長

○同人在石見國臨死時哥

○妻依羅維娘子哥

○丹比真人擬人麻呂哥

○同人擬依羅維娘子哥

○河邊官人見孃子屍哥 長

○志貴皇子薨時 姓名 哥 長

○志貴皇子薨後姓名哥 長

靈龜二年







この書は、このハ類聚系林了の後のかゝるものにて、その人ハ神皇正統記に如く、  
今際より下は、延江大津宮の御宇と太后との事、臣の大御代とす、  
其の事ハ、  
とす、  
又、  
延江大津宮の御宇と太后との事、臣の大御代とす、  
其の事ハ、

又、  
延江大津宮の御宇と太后との事、臣の大御代とす、  
其の事ハ、  
延江大津宮の御宇と太后との事、臣の大御代とす、  
其の事ハ、

如此許戀在不着者

カクバカリコトアラスハ、  
如此許戀在不着者  
カクバカリコトアラスハ、  
如此許戀在不着者  
カクバカリコトアラスハ、  
如此許戀在不着者

高山之磐根四卷手

死奈麻

死物乎

卷二 考一

在菅裳君乎者將待待打打靡靡吾里吾里髮髮〇〇〇〇萬

代日代日今本未霜乃置萬代日今本未霜乃置萬代日或本の奇又或本の奇又卷五卷五の上を

秋之田穂上秋之田穂上露務相朝霞露務相朝霞

何時邊乃方二何時邊乃方二

我戀將息我戀將息

近江大津宮御宇天皇代

○天皇賜鏡女王御制歌天皇賜鏡女王御制歌

或本、居明而  
君乎者將待奴  
波安珠乃吾里髮  
尔乎者更勝  
文、待  
君常庭耳居者  
奇靡非其里髮  
尔霜曾置尔  
家類、此世も  
表の、  
も、  
後王、  
女王、

△左の記も或本  
の、  
近江大津宮御宇天皇代  
○天皇賜鏡女王御制歌  
製字ハ傍に依て加つ。○今本、  
額田姫王の、



此改まらば美卷十三 四一 後王女と云ふこといひが  
しるすべしと云ふものあり別記あり

鏡女王は天宮の  
神祇に侍りて  
みまはさるる  
なり

妹之家毛纏而見麻思乎イモガヘモツキチニマシヲ一云妹之當經イモガヘモツキチニマシヲ山跡有大島嶺余ヤマトナルオホシマニチニ大和を向てふ  
而毛見武介イモガヘモツキチニマシヲ地中より又と云

家母有猿尾イモガヘモツキチニマシヲ一云家居麻之乎○標のまゝと云  
ハ道江へ遷すは後この女王は

大和の君をババガノノミマセトせん又云は後岡本宮よりまゝの大神の御名は  
標ハ其神代の元と奉る御名はババガノノミマセトせん又云は後岡本宮よりまゝの大神の御名は  
よみましなると云ふは大神の御名はババガノノミマセトせん又云は後岡本宮よりまゝの大神の御名は

鏡女王コタハツル 奉和哥コタハツル 今本御哥と云ふハ  
王より依る

秋山之樹下隱逝水乃吾許曾益目アキヤマノツキノミカガリユクミガ 水の益ミオモヒヨリ 御念從者ミオモヒヨリ 秋ハ水のつれ  
ハ山下の傍

内大臣藤原卿ウチオホオミ 此公も若き時この山をツツミ  
嬖鏡女王時ウチオホオミ 古ハハ

妻向といひはるる事ありと云ふあり  
鏡女王作哥コタハツル 今本は贈大臣と云  
ハ例はこゝろに仍て除

玉匣タマヒラ 覆宇安美開而行者フキヤスヤスメヒラケテユカ 匣の蓋ハ覆ト云ふことと開ト云ふこと  
して表のつらと云ふことと開ト云ふこと

君名者雖有吾名之情毛キミナハアラドワガナシラシモ 三の句は依ふことと云ふことと開ト云ふこと  
女はれと云ふことと開ト云ふこと

内大臣藤原卿和哥ウチオホオミ 今本は報贈とあり下も云ふことと開ト云ふこと  
此の古本は宜と云ふことと開ト云ふこと

玉匣タマヒラ 將見圓山乃シムロノマノ 市室山といふことと開ト云ふこと  
サナカヅラハハハハ

佐不寐者遂有勝麻之目サズバズハツヒニアリカテマ 三の句は依ふことと云ふことと開ト云ふこと  
三の句は依ふことと云ふことと開ト云ふこと

珠タマ 見諸戸山ミモロト 行ふことと開ト云ふこと  
行ふことと開ト云ふこと

注云或本一本云  
の中心かく他書

匣の蓋ハ覆ト云ふことと開ト云ふこと  
して表のつらと云ふことと開ト云ふこと

赤の家といふ事  
は清濁の解れぬ  
ことと開ト云ふこと

山城のつらと云ふことと開ト云ふこと  
アノつらと云ふことと開ト云ふこと



るるといふあり  
昔の一二或本  
のしるすあり  
さういふあり  
さういふあり  
さういふあり  
さういふあり  
さういふあり

はよみ采女を斬  
て流す罪あり  
一人をついで  
ハ前の采女よ  
ていふあり

大和の都より下りて、他國の地をとりて、さういふあり  
百人ハト、さういふあり、さういふあり、さういふあり、

○内大臣藤原卿娶采女安見兒時作哥。娶をめでると判らぬ  
の畧する人、さういふあり、さういふあり、  
女の童とて古言して、の新婦ハ、さういふあり、さういふあり、  
さういふあり、さういふあり、さういふあり、

○采女ハ上つて、他國より下りて、地をとりて、さういふあり、  
女兄弟姪を、擗て、賣つて、さういふあり、さういふあり、  
氏より、さういふあり、さういふあり、さういふあり、

吾者毛也 下におけし。安見兒得有皆人乃得難尔為云

安見兒衣多利 安見兒、この  
女の名こ。

○父采禪師婢石川島女時作哥。父采禪師ハ名下、三方沙  
弥也、同、さういふあり、さういふあり、

さういふあり、さういふあり、さういふあり、  
さういふあり、さういふあり、さういふあり、

今、さういふあり、さういふあり、さういふあり、  
さういふあり、さういふあり、さういふあり、  
さういふあり、さういふあり、さういふあり、  
さういふあり、さういふあり、さういふあり、

水篤新 信濃乃真弓 序之、弓ハ古ハ、甲斐信野、り、貢、カ、カ、カ、

者宇真人佐備而 宇真人ハ、紀ヨ、可美小男、可、小、訂、さ、い、何、さ、い、

不言常將言可聞 茂伊伎、姑、奴、地、さ、い、婦、女、の、さ、い、人、さ、い、

石川島女和哥 石川島女、和、哥、さ、い、

三篤新信濃乃真弓不引為而弦作留行事字 矢作、了、六、造、

水ハ借字、篤ハ  
黒き小竹、今本  
又紀ヨ、も、さ、い、  
と、い、ハ、誤、り、  
釋、肺、が、さ、い、  
島、女、と、い、  
眞、人、の、眞、人、  
さ、い、  
さ、い、

三、ス、カ、ル、信、濃、乃、眞、弓、不、引、為、而、弦、作、留、行、事、字、



















































漢も岸も  
野の野  
は和ハ  
おぼ  
ハハ  
ハハ

磐代乃岸之松枝將結人者反而復將見鴨

般代乃野中尔立有結松情毛不解古所念

山上臣憶良追和作哥

鳥翔成 有我欲比皆見良目

知松者知良武

近江大津宮御宇天皇代

近江大津宮御宇天皇代

○天白取玉躬不豫之時皇后

天皇二十二年九月より大津病あり十一月より崩り十二月より崩り

天原振放見者大王乃御壽者長久天足有

賀欲布跡羽目尔者雖視直尔不相香裳

天皇崩時太后御作哥

青旗乃小旗能上乎

賀欲布跡羽目尔者雖視直尔不相香裳

賀欲布跡羽目尔者雖視直尔不相香裳

賀欲布跡羽目尔者雖視直尔不相香裳

或あふ常陸凡上  
ふ草と五色の旗  
立しを引ん  
とあつの上代  
まきまきして草  
の割りうらやめ  
まきまきの草は惟



夜よりの白布... 穂麻衣服者... 臣旌二百竿... 今本... 影尔所見... 婦人作哥...

白布... 穂麻衣服者... 臣旌二百竿... 今本... 影尔所見... 婦人作哥... 今本ハ婦の上ハ天皇崩時...

万石... 荒れ假の墓... 顔... 思... 古...

空蟬師... 神尔不勝者... 戀君玉有者... 伎賊乃夜... 天皇大殯官之時哥... 浦宮為无火殯... 如是者刀豫知勢...



今も昔も人の死に  
三日のついでに  
を三日のついでに  
とらふ即ち死に  
下よとて今也よ

古事記 海河の祭の  
奥津甲異牟羅神  
邊津甲異牟羅神  
の始めくも  
とらふ即ち死に  
下よとて今也よ

の左右ふりてか  
くろくも真  
今の船も物  
ハ古なるが  
尾掛の楳  
古もたぎ  
つ同記の倭建  
命の吾足不得  
安成皆藝斯  
形との  
と和名抄の船  
を多伊之  
をむいて船尾  
よまて船木の  
柄曲れる船  
とらふ即ち死に  
下よとて今也よ

この訂よ神のついでに何ぞの徳ゆいへて承くぬめずんものをもとに  
みんをくくく悔する古事記の條 布刀玉命以久米德控度其御後方自言後  
此以内不得還入るを  
とらふ即ち死に  
下よとて今也よ

八隅知之吾期大王乃 我等と和期と  
大御船待可將戀

四加貝乃辛崎 大宮人のおまらへつて梓本の人まら乃のウ  
ふべよ人くもおぼ  
おぼよ人くもおぼ

大后御作哥 新巻の程とて及の  
痛勿波祢曾

鯨魚取 淡海乃海牟奥放而 擗來船言 邊附而  
來船言 奥津加伊 擗來船言 邊附而

痛勿波祢曾 痛勿波祢曾 痛勿波祢曾  
痛勿波祢曾 痛勿波祢曾 痛勿波祢曾

石川夫人作哥 石川麻呂大臣の女  
神樂浪乃 大山守者 爲誰可山

介標結 君毛不有國 爲誰可山  
從山科御陵退散之時 爲誰可山

額田姬王作哥 額田姬王作哥  
額田姬王作哥 額田姬王作哥

額田姬王作哥 額田姬王作哥  
額田姬王作哥 額田姬王作哥

額田姬王作哥 額田姬王作哥  
額田姬王作哥 額田姬王作哥

額田姬王作哥 額田姬王作哥  
額田姬王作哥 額田姬王作哥

額田姬王作哥 額田姬王作哥  
額田姬王作哥 額田姬王作哥

額田姬王作哥 額田姬王作哥  
額田姬王作哥 額田姬王作哥

額田姬王作哥 額田姬王作哥  
額田姬王作哥 額田姬王作哥

額田姬王作哥 額田姬王作哥  
額田姬王作哥 額田姬王作哥

額田姬王作哥 額田姬王作哥  
額田姬王作哥 額田姬王作哥

額田姬王作哥 額田姬王作哥  
額田姬王作哥 額田姬王作哥

額田姬王作哥 額田姬王作哥  
額田姬王作哥 額田姬王作哥

額田姬王作哥 額田姬王作哥  
額田姬王作哥 額田姬王作哥



























ふんもの園の里の  
をん五河河  
ふんも橋寺  
あつうも橋の  
もあつうも

侍宿せしむ  
こハ殿宿せしむ  
伊座止乃伊  
長江のわ  
名ハありりり  
りりりり

うう家の庭羽裳つり目一様

島宮池上有

荒備勿行

放鳥

君不座十方

高光吾日皇子乃伊座世者島御門者

不云八者

益乎

外尔見之檀乃岡毛

君座者常都御門跡

侍宿為鴨

夢余谷不見在之物乎

爵悒宮出毛為鹿

依日之隈廻乎

天地与共將終登念乍奉仕之情違奴  
朝日且流  
邊余群居乍  
御立為之  
庭多泉  
流淚止曾金鶴  
依田乃岡邊余侍宿為余

門の出入り... 依日之隈の依ハ各言の...  
天地与共將終登念乍奉仕之情違奴  
朝日且流  
邊余群居乍  
御立為之  
庭多泉  
流淚止曾金鶴  
依田乃岡邊余侍宿為余



ひまの言今も  
了

悲き情よはなせしきまをさひいもてを  
往くまらよむはなせしきまをさひいもてを

御立為之島子母家跡住鳥毛荒備勿行  
御立為之島子母家跡住鳥毛荒備勿行  
之幸の月まをもかて 年替た右  
互て清あくちんとちん

御立為之島之荒磯子  
御立為之島之荒磯子  
の形ゆりをりつるべし  
今見者

不生有之草生余來鴨  
不生有之草生余來鴨  
の形ゆりをりつるべし  
今見者

鳥垣立  
鳥垣立  
の形ゆりをりつるべし  
今見者

飼之雁乃兒  
飼之雁乃兒  
の形ゆりをりつるべし  
今見者

栖立去者  
栖立去者  
の形ゆりをりつるべし  
今見者

檀岡介飛反來年  
檀岡介飛反來年  
の形ゆりをりつるべし  
今見者

吾御門千代常登波余  
吾御門千代常登波余  
の形ゆりをりつるべし  
今見者

將榮等念而有之吾志悲毛  
將榮等念而有之吾志悲毛  
の形ゆりをりつるべし  
今見者

東乃多藝能御門介  
東乃多藝能御門介  
の形ゆりをりつるべし  
今見者

雖伺侍昨日毛今日毛召  
雖伺侍昨日毛今日毛召  
の形ゆりをりつるべし  
今見者

言毛無  
言毛無  
の形ゆりをりつるべし  
今見者

水傳舞磯乃浦回乃  
水傳舞磯乃浦回乃  
の形ゆりをりつるべし  
今見者

木丘開道乎  
木丘開道乎  
の形ゆりをりつるべし  
今見者

又將見鴨  
又將見鴨  
の形ゆりをりつるべし  
今見者

今見者  
今見者  
の形ゆりをりつるべし  
今見者

和名抄ふ羊躰  
踏をいんらふ  
毛あつととあ  
れれらつととあ  
めつととあ  
ねびつととあ  
まらつととあ

和名抄ふ羊躰  
踏をいんらふ  
毛あつととあ  
れれらつととあ  
めつととあ  
ねびつととあ  
まらつととあ











紀ノ明ノ菟ノ我ノ氏ノ  
諸族等悉集  
而次于墓所  
摩理勢臣壞墓  
所之庐云云云々  
云々云々

因テ市郡大内陸  
以テ内借字ヲ大  
市ノ所ノ以テ小  
市ノ對シて市  
を思ヒてテ市  
ことニ市ノ市ノと  
書シてテ市ノと  
とらシてテ市ノと

玉垂乃辞越乃大野之  
且露余玉藻者泥打  
夕霧尔衣者沽而  
枕辞旅宿鴨為留不相君故  
草

反哥

敷妙乃辞神易之君  
玉垂之辞越野過去  
亦毛将相八毛  
亦毛将相八毛

死スるコトを  
中ノ心ノを  
後ノ世ノに  
れド外ノへ  
ことニよリて

石ノをレいハす  
くニ冠シて

明日香皇女

天智天皇の女  
四年四月薨  
木庭殯宮之時

柿本朝臣人麻呂

天智天皇の皇子  
上之泊瀬

哥

昔もあつた  
女の手を  
上之泊瀬

飛鳥明日香乃河之上流石橋渡

古へさ  
下瀬

下瀬

打橋渡



赤坂... 石橋... 生麻非留玉藻毛叙

絶者生流... 打橋生

子鳥礼留... 川藻毛叙干

者波由流... 何然毛

吾王乃立者... 玉藻之如許呂卧者

川藻之如久靡相之... 宜君之

朝宮宇亡賜哉夕宮宇北月賜哉

宇都曾臣跡念之時... 花折挿頭秋立者

敷妙之... 辭袖推

鏡成雖見不厭三五月之益目頰漆所念之

君與時々幸而... 遊賜之御食向

木髓之官乎... 常官跡定賜味澤相

所已乎之毛... 綾小憐

宿兄鳥之... 朝鳥

來為君之... 其故為便知之也

此去... 遣問流

情毛不在... 其故為便知之也

人まう大舎人まが

情毛不在



音耳母名耳毛不  
音耳母名耳毛不

天地之弥遠長久思將徂  
御名介

懸世流明日香河及萬代早布屋師  
吾王乃開見何

此焉  
馬を初と別てこくをバのバを異とんべい。○初のをの古

言いしことありし今もあけびあきよ侍りぬるこ。

反哥

明日香川四我良美渡之塞益者進留水母能杼尔賀有萬

思  
今日こそかぬ明日はた又足るらん

明日香川明日谷將見某念香毛  
とるばら。どうくよこ。一淨とん

古今多集の歌と  
せのの國とるる

吾王御名忘世奴  
一本不所  
忘とん

高市皇子尊

朱鳥三年四月日並知皇子その費まうて後よびさるる  
太子よ立給ひし。一。統十年七月薨す。の人百口これ

城上殯宮之時  
郡三立岡とあり

柿本朝臣人麻呂作哥

挂文思之伎鴨

君よ。志願くらし。即貴よ思れて思つて。一。まう。きこ

今本よ一云由  
遊志計礼杼  
母くくハマムル

けその皇太子よ  
まま。一。ハハ  
の偏な。一。ハ  
の。一。ハ  
の。一。ハ  
の。一。ハ

今本よ一云由  
遊志計礼杼  
母くくハマムル



今九ノノ原の  
風里の西北二十  
町に五條野  
の所ありて  
陸軍ありて  
持統天皇を  
葬まつりて  
神依杖跡の神進  
とありて  
るせるに  
よつて

言父母 綾介畏伎 明日香乃 真神之

原介 綾介畏伎 明日香乃 真神之

賜而 神依杖跡 船隱座 八隅知之 吾大王乃

所聞見為 北月友乃 國之

真木立 既 不破山 越而

拍劍舞 和射見我 原乃 行宮介 安母理座而

天下 拂賜而 食國 宇定

賜茅 鳥之鳴 吾妻乃 國之 御軍士

千般石破 不奉仕 任賜者

降と約めて 天下 拂賜而 食國 宇定

賜茅 鳥之鳴 吾妻乃 國之 御軍士

千般石破 不奉仕 任賜者

人乎和為跡 次の言は並べやせとむむ。○卷二十の吟詠

古言して 神依杖跡 船隱座 八隅知之 吾大王乃

國乎掃部茅 今本治跡 且掃とありて 吾大王乃

皇子隨 皇子はありて 軍のついで 任賜者

任賜者

任賜者











もろくもいふ  
初ハセリ集ヤ  
ふんろ花ぐら  
くろくろやまぎ  
くろくろやまぎ  
くろくろやまぎ  
くろくろやまぎ  
くろくろやまぎ

百汝の地と廣  
津郡よつて  
水のまら

いのみとえま  
し

上の日並知を子等の舎人の侍立為之為よ下わななきつるものありぬ  
夜ハ津川の舟の舎下侍立つるものありぬ

鶉成辞 伊波比廻雖侍保依母良比不得者 悲堪加ひて在

春鳥之辞 依麻欲比奴礼者 嘆毛 くるてなかりて次のを起り

未過尔憶毛 未盡者 秋立て幾日あるねばかどんかどんか 仍て今

言依故久辞 百濟之原從 山の宮に

神葬并伊座而 以下朝立伊森

朝毛吉辞 木上宮子常宮等 高知座而 高之

神之萬代跡所念食而作良志之香來山之宮 萬代尔過并

登念哉 天如振放見

王手次懸而將德恐有騰文 初めの言を又ソひて句を結ぶる。○は

反哥 奇大假ハ字つちハ百中解ありて、あ

久堅之天所知流 君故尔日月

毛不知戀渡鴨 日月のこころおぼほす。まほほほほほ

埴安乃池之堤之隱沼 行旅をたぬるよつれは

去方子不知舍人者迷惑

及そあ一蔭を  
のやとかりて水も  
足くぬかかれぬ  
とつとつとつとつ  
を判るひひと



















死し人をはめ  
さへてのあ後

今うたの鳥徳はも  
のほらよも羽舎こ  
さくもよまされ  
さくもよまされ

言もなぐ言も  
つひつゝ守仍  
てけ或本を  
てさくもよまされ

一頁も物と物と  
豚さくもよまされ  
さくもよまされ

朝立伊麻之豆 アサタケイマシテ 立つまきりて或 イリヒナス 入日成 成ハカシニ 隱去之鹿齒 ヒシカニ 吾妹 ワガ妹

子之形見介置有 コガカタニニオケル 有の字或本 有の字或本 若兒乃 ニドリコノ 或本 或本 乞泣每取與 コヒナクゴヒトリアラ 或本 或本 取

物之無者 モノシナケレ 鳥徳自物 鳥ハヲトコジモノ 男がうものこを今た鳥徳 男がうものこを今た鳥徳

腋狹持吾妹子與二人吾宿之枕付 ワキササミチ 吾妹子 ワガ妹 二人 二人 吾宿之枕付 ワガ宿ノマクラツキ 辞孀屋之内介 辞孀屋ノ内ノ介

晝羽裳 ヒルハモ 浦不樂晚之 ウラササビクラ 或本 或本 浦不恰晚 浦不恰晚 夜者裳 夜者裳 氣衝 氣衝

明之嘆友 アカシノナクトモ 友ハ 友ハ 世武為便不知介 世武為便不知介 或本 或本 為便不知 為便不知 戀友 戀友

相因乎無見 アヲヨシヲナシ 或本 或本 相 相 大鳥 大鳥 辞羽易乃山介 辞羽易乃山介 春 春 奈流羽買山 奈流羽買山

在人之云者石根左久見手 在ヒトノイハクバ 石根 石根 左久 左久 見手 見手 或本 或本 石根割見而 石根割見而 去 去 若 若 根 根 を を 踏 踏

各積來之 各積來之 母 母 の の 心 心 を を 沖 沖 へ へ 流 流 せ せ ぬ ぬ 積 積 天 天 之 之 雲 雲 霞 霞 を を 流 流 せ せ ぬ ぬ 士 士 吉 吉 雲 雲 曾 曾 無 無 寸 寸 打 打 蟬 蟬 跡 跡 頭 頭 の の 方 方

念之妹之珠蜻 念之妹之珠蜻 辞 辞 髮 髮 髻 髻 谷 谷 裳 裳 不 不 見 見 思 思 者 者 一 一 の の 心 心 を を 流 流 せ せ ぬ ぬ 反 反 哥 哥

袂代紀一伊麻諾  
そ、神妹のそ、の箱の  
庭よ新まや、の神  
妹のそ、つひのめ、  
お迎ま、お伊、  
ひり、つひ、つひ、  
を、は、て、あ、つひ、  
つひ、つひ、つひ、  
つひ、つひ、つひ、

反哥 反哥 今 今 中 中 一 一 二 二 三 三 四 四 五 五 六 六 七 七 八 八 九 九 十 十 十一 十一 十二 十二 十三 十三 十四 十四 十五 十五 十六 十六 十七 十七 十八 十八 十九 十九 二十 二十 二十一 二十一 二十二 二十二 二十三 二十三 二十四 二十四 二十五 二十五 二十六 二十六 二十七 二十七 二十八 二十八 二十九 二十九 三十 三十 三十一 三十一 三十二 三十二 三十三 三十三 三十四 三十四 三十五 三十五 三十六 三十六 三十七 三十七 三十八 三十八 三十九 三十九 四十 四十 四十一 四十一 四十二 四十二 四十三 四十三 四十四 四十四 四十五 四十五 四十六 四十六 四十七 四十七 四十八 四十八 四十九 四十九 五十 五十 五十一 五十一 五十二 五十二 五十三 五十三 五十四 五十四 五十五 五十五 五十六 五十六 五十七 五十七 五十八 五十八 五十九 五十九 六十 六十 六十一 六十一 六十二 六十二 六十三 六十三 六十四 六十四 六十五 六十五 六十六 六十六 六十七 六十七 六十八 六十八 六十九 六十九 七十 七十 七十一 七十一 七十二 七十二 七十三 七十三 七十四 七十四 七十五 七十五 七十六 七十六 七十七 七十七 七十八 七十八 七十九 七十九 八十 八十 八十一 八十一 八十二 八十二 八十三 八十三 八十四 八十四 八十五 八十五 八十六 八十六 八十七 八十七 八十八 八十八 八十九 八十九 九十 九十 九十一 九十一 九十二 九十二 九十三 九十三 九十四 九十四 九十五 九十五 九十六 九十六 九十七 九十七 九十八 九十八 九十九 九十九 一百 一百



去年見而之秋乃月夜者テラレド或本レヒミシ相見之妹者イモトシカガ弥年放或本

離のつゆり死すらゆき年

の秋よあをちるり

衾道子引手乃山介或本衾路引出山と云つても手合せも妹乎置イモトオキ

而山徃往者生跡毛無或本山路念介と云

△今本よ或本乎とて長寺二首短寺三首を全奉とれい今ハ異る言の...  
本文の...言の下よ...  
乱れ...  
及眼を火葬せ...  
やまりを...  
つゝ...  
めつ...  
父...  
おかし...  
谷毛見而不坐者...

まけ集るれはぐり考  
てこそはるるん

家來而吾屋乎見音イニヤテ吾ハリ妻又トコノ玉床之卷七拂セタ乃方玉床乎打セ

の妻ハ似つるぞやホカニキケリ外向來妹木枕イモカコ

かへり来て見ればホカニキケリ...

まきとやハ

○去年死て葬や...  
つ...  
床よ...  
こ...  
も...  
か...  
ふ...  
待...

古事記輕大島  
女乃侍前お不  
ま...  
ら...  
ぐ...  
ま...  
と...  
い...











雖多オホド 新加礼の御名ナリイハレ 名細之ナハシ 狭岑之島乃ササノシマノ 荒磯アラシ

回介ウケノ 今本面イマホン 盧作而見者ロノシテミル 浪音乃茂濱邊予ナミトノシゲハマノ 枕介為而荒床マクノシテアラドコ

妻知者來毛問ツマシラバモト 益字玉梓之タニボコノ 道太介不知ミチノタケニシラ 家知者往而毛將告イハシラバユキテモツトム

待加戀良武マカコラハム 愛伎妻等者アイキツマナラ 自伏君之オホレトクニ 家知者往而毛將告イハシラバユキテモツトム

妻知者來毛問ツマシラバモト 益字玉梓之タニボコノ 道太介不知ミチノタケニシラ 家知者往而毛將告イハシラバユキテモツトム

待加戀良武マカコラハム 愛伎妻等者アイキツマナラ 自伏君之オホレトクニ 家知者往而毛將告イハシラバユキテモツトム

妻知者來毛問ツマシラバモト 益字玉梓之タニボコノ 道太介不知ミチノタケニシラ 家知者往而毛將告イハシラバユキテモツトム

反哥

宜ハ事申シテ  
きくけの濁ハ

ハ指シ  
ハ指シ

初ハハハハハハハ  
言ハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハ

妻毛有者ツマモアリ 探而多宜麻之サシテタダシマノ 紀キ 伊波能イハネ 依ヨ 佐美乃山野上乃サミノヤノノ 宇波疑ウハナヒ 過去計良受カクノケテラズ

也ヤ 依ヨ 佐美乃山野上乃サミノヤノノ 宇波疑ウハナヒ 過去計良受カクノケテラズ

也ヤ 依ヨ 佐美乃山野上乃サミノヤノノ 宇波疑ウハナヒ 過去計良受カクノケテラズ

也ヤ 依ヨ 佐美乃山野上乃サミノヤノノ 宇波疑ウハナヒ 過去計良受カクノケテラズ

也ヤ 依ヨ 佐美乃山野上乃サミノヤノノ 宇波疑ウハナヒ 過去計良受カクノケテラズ

也ヤ 依ヨ 佐美乃山野上乃サミノヤノノ 宇波疑ウハナヒ 過去計良受カクノケテラズ

奥波來依オキツキヨルアリ 荒磯字色妙乃アラシノシキマノ 冠カウ 枕マク 等卷而ナラシメテ 奈世流君香聞ナセノカモ

通トウ 柿本朝臣人麻呂在石見國臨死時自傷作哥カキモトノチノヒトマロノイハシメノクニシテシニテヨクニ

柿本朝臣人麻呂在石見國臨死時自傷作哥カキモトノチノヒトマロノイハシメノクニシテシニテヨクニ



先を後よべりとの  
うらぬよおろこと  
つづ地の名もあや  
こころも後りん

一本谷亦交而  
あんと谷  
のこもふふ交と  
いふふふも  
りーまや

ひ氏ハ多治比  
をむるも姓氏  
つづれりとのあや

次より死しち一ハ六位七位をのり

鴨山之カモヤマ磐根之イハネ卷有マキ吾子鴨不知ワラカモ芋妹之トイモガ

柿本朝臣人麻呂死時妻依羅娘子作哥

且今日且今日吾待君者石水カニニミ貝亦交而ミナト

有登不言八方ヤマト直相者相不勝タカハ石川余雲立渡礼見イシカハ

丹比真人ニヒト擬柿本朝臣人麻呂之意作カニノ

哥カ今今こも報哥カ報と云へき所カ

荒浪余縁来玉子枕余卷アラナミ吾此間有跡ワレコ

擬柿本朝臣人麻呂妻之意作哥カニノ

天離夷之荒野余君子置アラノ而念モヒ

有者生刀毛無アリ今本こも寧樂宮と標カニノ和銅三年の遷都カニノ

和銅四年カニノ辛亥カニノ河邊宮人姫嶋松原カニノ

古事記よ  
仁徳天皇  
御紀







手火之光曾幾許照而有

今本より短歌二首とあるを互すりてあつては後より奇なりぬ人のことと目録より右の互すりて或本奇二首とあるは片たのあつては右の互すりてあつては別な語句をた方を載しを互すりてあつては

○志貴皇子薨後姓名作奇たそは薨りて後よりあつては

高圓之野邊乃秋芽子徒開香將散見人無尔はか子ハカの宮

見管思奴幡武ナチリツ子キミガカダミニ勿散祢君之形見尔ハカ子ハカの宮

御笠山野邊往道者ユクニキハ或野邊後コキダクモアレニケルカモ已伎太雲荒余計類鴨今本

繁荒有可シニアレカとあるはこまじくはくといふことと云言ふことのハサニアラナクニハ多きことと云ふはかきりては或本の云をとりぬ久尔有勿國

たのまきと云ふはかきりては或本の云をとりぬ久尔有勿國

天照

今本より右奇笠朝臣金村奇集出とありては右の互すりてあつては

万葉集卷二之考終



萬葉考

全二十冊

外別記副

追々嗣出

賣弘所

心齋橋筋北久太郎町北八町

河内屋喜兵衛

天明五年子仲春發行

根津兵庫

中村源兵衛板

攝陽兵庫津復古堂壽梓

万葉考一二之卷考遺

全一冊

出来

万葉考三四之卷外

別記副

近刻

右 武庫春海述

追々嗣出

浪速上古之圖

英、圖說副

補武庫帝序より、應神帝序より、仁徳帝序より、  
よりの安用帝との地形を二圖ふらうとせらるるを  
補武庫帝序より、以て地形の變り、  
右の右形を引く、西の著と

近刻

右 中村直躬述

同 中古之圖

塘河院帝序の地形より、凡七百年ふたる

近刻

同 近古之圖前二種古之圖ト号テ出来

三十六歌仙 烏石先生書







Blank rectangular label at the top of the page.

三十六卷

同 出於八國

同 中於八國

林 中村直博

林 國府

出於上之國

林 卷車春

出於三四之卷

出於一二之卷

出於兵車

Handwritten marks on the right margin.



